

いまわしい悪法が撤回されたその日、人々は歓喜に湧いた。

魔法立国である我が国は五年前から、貴族の結婚相手は勅命によって決めるという法が成立した。魔術の才能は生まれ持った資質によるところが大きく、それは並大抵な努力では覆らない。ならば優秀な子どもが産まれる魔術の持ち主をもった組み合わせを国が指定してしまおう。そんな単純な思いつき、しかしこれまで誰も実行に移したことのなかったことを先代の国王陛下はためらわずに決定してしまったのだ。その悪法は国王が病で身罷り、代替わりするまで続いた。

今日、第一王子の即位と同時にその廃止が決定して即日施行される。国に定められた相手と別れ、ある貴族の令嬢は想い合っていた恋人と、ある令息はよ

り家のためになる娘と再婚をする。

もっとも、強制された結婚であっても積み重ねた年月の分確かな愛情が生まれることもあるから離婚しない者もいる。けれども、わたしは離婚する側だ。

鼻歌を歌いながら、祖先が王家から下賜された名剣を磨く夫にわたしは声をかけた。

「ねえエルヴィン、話があるのだけれど」

名前を呼ばれた夫は手入れを中断してこちらを振り向いた。逆立った黒髪、切れ長で涼しげな瞳をつり上がらせた、整った顔。結婚したのは一年ほど前だけれど、至近距離でみるとまだドキマギしてしまう。

「なんだミレーユ、改まって。なにか欲しいものでもあるのか？ オレがなんでも買ってやるぞ」

剣を鞘に収めて立ち上がったエルヴィンは、俯いたわたしにずっと近寄って

きて腰を抱く。くびれをたしかめるように手を這わせられて、びくつと身体が震えた。

「ち、ちがう、おねだりしにきたわけじゃないわ」

幼なじみでもある彼を睨みつければ、あまったるい声でかわいくねえなあと呟かれた。

「じゃあなんだ、お小言か？ さすが級長さまは真面目だよな」

親同士が交流をもっていたため、幼い頃から共に育ち、同じ魔法学校に進学した。学生時代のわたしのこともよく知っていて、未だに級長様とからかってくる。

親しげな軽口に流されて、決意が鈍る前にちゃんと離婚を申し込まなければ。
「エルヴィン、座学が得意じゃなかったあなたでも今日がなんの日かはわかるわよね」

幼い頃に喧嘩していたときの延長でつかわいくないことを口にしてしまう。後悔したけれどエルヴィンは特に気にした様子もなく双丘をむにいと揉みだしきはじめた。

「ちよつと……！　ひとが真面目な話をしているのにお尻揉まないでっ！」

むっちりとした尻たぶを左右に開きながら揉まれて、まだ日が高いのに妙な気分になりそうになる。日々剣を握っている硬い指がお尻に食い込む感触に、ひくんっ♡と秘裂がふるえた。

「べつに結婚してんだからいいだろ尻くらい揉んでも。お前だって、文句いいながら感じてんじゃねえか。でっかくてかわいい尻震えさせてよ♡」

窄まりに指を食い込まされてそのまま前のくぼみにそって長い指があわいになぞる。膨らみかけた肉土手に触れられそうになって、あわてて身を振った。

「ばかつ、真面目に答えて」

乱れた息を整えながら睨み付ければ、小さく「かわいい」と呟かれた気がする。喧嘩友達だったわたしでも、妻だと思えばかわいく思えるんだろう。でも、今日でそれは終わりだ。

「今日が何の日か？ さすがのオレも知ってる。馬鹿げた法律が撤回される日だろ。でもオレたちにはいまさら関係ねえよ」

筋肉質で分厚い身体のなかにすっぽりとおさめられて、抱きしめながらうなじに唇を寄せられる。やわらかくてあたたかい感触に、決意がぐらりと揺らぎそうになるがどうにか言葉を絞り出した。

「か、関係あるでしょ。だってみんなようやく本当に好きな人と結婚できなくて、息巻いてるんだから」

わたしの言葉に、エルヴィンの瞳が一瞬ぎこちなく揺れる。やっぱり、とわたしは心の中で溜息をついた。

「……いまさらそんなこといってもどうにもならねえだろ」

絞り出された低い声に、胸の奥がずしりと重くなる。わたしはエルヴィンの本当の想い人をしてっている。魔法学院時代の同級生である癒やし手のイヴァンカだ。プラチナブロンドの巻き毛をした、儂い雰囲気を漂わせる美女だった。天真爛漫な性格をしていて、いつも周りを和ませていた。イヴァンカとエルヴィンが演習でペアになれば、お似合いの二人だと同級生がよく盛り上がっていた。校則を重んじて周りに煙たがられていたわたしとは大違いだ。わたしを含めた誰もが、お似合いの二人が卒業後一緒になるのだと思っていた。

けれどあと少しで学校から巣立つという日に、稀代の悪法が制定された。そのときの混乱は、昨日のように思い出せる。すでに決定していたはずの縁談が白紙になり、家や自分の意志で相手を選べなくなるのはあつという間だった。

そんな情勢だったからか、誰もが将来一緒になると信じて疑わなかったイ

ヴァンカとエルヴィンは結ばれることはなかった。そしてそれからしばらくたって、わたしたちは国の決定で結婚した。だから人間として嫌われていないのだとしても、女として一番愛されているかといわれると自信がない。

「だから、別れてっていつてるの。離婚して。この機を逃せば、離婚なんてできないわよ」

「……そんなにミレーユはオレと離婚したいわけ？」

低い声で尋ねられて、ぞくりと背筋が震えてしまう。少し怒っているような気がするが、なぜだかわからない。もしかしたら、自分から別れ話を切り出したかったのだろうか。プライドが傷ついたのかもいろいろな想像を巡らせるが、はっきりとした答えはわからない。

「オレはしたくない」

「つ、わたしがしたいの」

「いまさらそんな話するなんて、好きなやつでもいるのかよ、たとえばセドリックとか」

「……セドリック？」

剣技だけ抜きんでいたエルヴィンと違って、なんでもそつなくこなす優等生だった。彼とは比較的親しかったと思うが卒業してからは疎遠になってしまっている。的外れな心配だが、そう思わせた方があとくされなく別れられるのかもしれない。

「そ、そうよ、わたし学生時代はセドリックが好きだったの。あなたと違って紳士的だったもの」

「……セドリックだって別の女と結婚してるだろ。あいつが離婚するとは限らねえぞ」

もつともな指摘に思わず押し黙ってしまふ。そんなわたしを見て、エルヴィンは深いため息を吐いた。

「なんだ、セドリックと約束してるわけじゃねえのか。それなのにオレと別れたいって？ 独り身になってもいいからオレと離れてえのかよ」

「……だって、国に決められただけじゃない。もういいって言われたなら離婚するのは当然だわ」

「へえ、そんなに嫌われてたなんてなあ」

腰を撫でさすっていた手が背中を這い、ドレスの留め具を外していく。

「ちょ、ちょっと、なにするつもり……」

「ん？ こうしてやればお前の気も変わるかと思つてな」

ドレスをはぎ取られて、コルセットとガーターベルトだけの姿にされる。大きな手に太ももをはいずり回されて、その手の温度に息が上がってしまう。

「ふっ♡んっ♡」

もともと嫌いで別れたいわけじゃない。エルヴィンは口が悪くてがさつなところもあるけれど、いつだってわたしのことを気遣ってくれる。わたしが舞踏会で、流行の髪飾りをじっと見つめていた時も、その意匠を担当した職人を、伝手を駆使して屋敷まで招いてくれた。そんなに贅沢なものはいらないといつても、普段儉約しているのだから気にせず買えばいいと背中を押してくれた。別にそこまで髪飾りがほしかったわけじゃないけれど、着飾りたいという気持ちを茶化さず認めてくれたのがうれしかった。

その髪飾りは一ヵ月まえほどにわたしの手元にきたけれど、もったいなくてまだ使えていない。

「なあ、オレたちいままで上手くやってただろ？ 離婚したいなんていうなよ ミレュー」

「あっ♡」

首筋に唇を触れさせながらしゅるりとコルセットの紐をほどかれる。身をよじろうとしても、厚い身体に抱きすくめられたらビクともしない。

「や、まじめなっ、はなししてるのにつ♡」

「真面目な話？ オレがはいそうですかっていうまで終わらないつもりだろ、級長さんはいつもそうだったもんな」

胸からおなかを覆っていた布をするりとはぎ取られて、たゆんと双丘がまろびでる。左右から寄せるように持ち上げられて、軽く揺らされる。大きな手に収まり切っていないそれがぐにゅぐにゅとエルヴィンによって形が変えられる様子をみて、おなかの奥がきゅっと締め付けられる。

「はっ♡でっけえおっぱい♡ここ揉んで大きくしてやったのだから忘れたわけじゃねえよな♡」

「ふ、ざけないでっ……！ んんっ♡」

むに♡と柔らかい肉に指を食い込まされて、とくとくと心臓の鼓動が早くなっていく。エルヴィンは離婚の話を真剣に受け取らないでこれからセックスするつもりらしい。

「まじめなっ、はなしなのっ」

「やだ、オレお前と離婚するつもりねえもん。おまえ頭いいからオレ口喧嘩じゃ勝てねえし。だったらオレも得意分野で勝負していいよな？」

「とくいぶんやってっ♡や、そこさわないでえ♡」

ぷくっ♡と頭をもたげた乳首の表面だけを指の腹でスリスリと撫でられる。

すりすり♡すりすり♡

たったそれだけの単純な運動を繰り返されているだけなのに、息が乱れて乳首がどんどん固くなってしまふ。

「ふっ♡うう♡」

「はっ♡離婚したいだつて？　ちよつと触られただけで乳首こんなに固くしてよくいうぜ」

勃起した乳首をきゅっ♡と摘ままれて、根元から先端までゆっくり抜きあげられる。ずつとこうしてかわいがってもらっていたから、勝手に肩が跳ねて反応しちゃう♡

「も、へんたいっ♡やめてえよお♡」

おもわず泣き言を漏らせば、勃起した先端を左右にねじられる。側面の気持ちいい場所を指で擦られて、思わず足が開いてしまう。

「ふっ♡そこっ♡よわいの知ってるくせにい♡」

「そりゃそうだろ、なんもしらないお前をこないやらしいカラダに開発してやったのオレだもん。お前の頼みならなんでも聞いてやるし、たくさん快くし

てやるからさあ、考え直せって」

ちゅっ♡とちゅっ♡と耳にキスを落とされながら囁かれると、頭に低くてあまいハチミツみたいな声が広がって、またカラダの熱が上がってしまう。このままじゃ、流されてしまう。

「っ、い、いや……」

ふるふると小さく首を振れば甘さを潜めた声で「へえ」と呟かれて胸に甘い痺れが走った。

「んっ♡♡おっ♡そ、それっ♡」

すっかりぼつてりと腫れてしまった乳首を無理やり上下に大きく伸ばして、乳頭を動かないように固定される。なにをされるかわかって、どろりと秘裂から愛液が漏れだした。

「素直じゃねえなあ。オレのかわいがり方が足りねえのかな？」

「ちょ、ちよっと……！」

「おまえの一番好きなやつしてやる♡」

ぐに♡と伸ばされた先っぽに指を添えられて、固いそこをピンっ♡ピンっ♡何度も弾かれる。ビリビリしたのがおなかの奥に響いて、足が左右に広がった。

「そっ、れっ♡やあ♡」

「いやじゃねえだろ♡太ももプルプルさせてかわいいな♡」

足の間にエルヴィンのたくましい太ももが滑り込む。膝でショーツのクロッチ部分をぐに♡と押しつぶされて、くちっ♡と粘り気のある水音が鳴った。

「な♡」

「は♡乳首かわいがってやっただけで濡れてる♡おれが手塩にかけて育ててやったザコ乳首だもんなあ♡むしろいつもより感じてるんじゃない♡」

クロッチ越しにクリトリスをぐりぐり♡と押しつぶされて、ビク♡と背中がのけぞる♡力が抜けてよろめけば、自分からおマンコを太ももに押し当ててしまつてマン肉がきゅんきゅん♡つて切なく震えた。

「ふっ♡ふう♡ふっ♡」

荒い息をしながら夫を睨みつければ形のいい眉を片方だけ吊り上げて笑う。

「まだ余裕だな、その生意気な顔すげえそそるわ。おっぱい弄られながらやらしいお豆さんかわいがるとすぐイっちゃまうくせによお♡」

乳頭の窪みに指を食い込ませてひたすらほじくり返される。それだけでも脊髄に気持ちいいのが駆け上がっていつて、流されそうになるのに、おマンコに押し当てた膝をガクガクと振るわせ始めた。

「や♡やめっ♡それされるとクリトリスぶるぶるされるからあ♡らめっ♡きもちいいのらめえ♡」

乳首ほじられながら、クリトリスズーッと振動させられる♡しつとりと濡れていたおマンコから、どぽっ♡と愛液が漏れだしてショーツにしみ込んでいく。びったりと張り付いた布は摩擦をなくして、エルヴィンに与えられる刺激がよわよわなおマンコに全部伝わる手助けをしてしまう♡

「~~~~♡うづ~~~~♡」

歯を食いしばって気持ちいいのをやりすごそうとしても、だんだん身体の熱が高まってくる。乳首はどんどん腫れぼったく真っ赤になって、クリトリスも大きく固くしこってピンピンになってる♡ズーッと気持ちいいのがおなかの奥と頭に溜まって、早く絶頂したい♡って準備してる♡わたしのカラダ、負ける準備してるっ♡

「ほら、離婚しませんっていえよ♡セドリックのやつはこんなセックスしてくれねえだろ♡真面目な顔してドスケベな級長様の相手はオレしかできねえん

だって♡」

乳首をきゅう♡と摘まんでぐい♡と引っ張られる。まるで搾乳されてるみたいに乳首をねじられて、濁った下品な声が出ちゃう♡

「おほっ♡まけ、にゃいっ♡こんなことされたってえ♡わたしのきもちはかわんにゃいんだからあ♡せつくしゅなんてできなくてもいいから、りこんしゅるのっ♡」

気持ちよすぎて、全身の力が入らない。ガクガク♡と膝が震えているけれど懸命に言葉だけでも抵抗すればエルヴィンが「へえ」と低い声で囁いた。

「ミレーユはオレにいやらしく調教されたこのカラダまでなかったことにしたいわけ？」

何が彼の逆鱗に触れたかもわからないまま振り返れば、ギラギラとした瞳のなかに冷たいものを宿して笑っていた。

「エルヴィン……？」

どうやらまた怒らせてしまったらしいが、理由がわからないでいると唐突に乳首をぎゅう♡とつままれた。

「ひっ♡」

つよい刺激なのに痛みより快感が勝って、そんな自分に驚いているとエルヴィンが笑う。

「は♡淫乱♡なかったことにしたくてもこのえっろいカラダは戻れねえよ。ミレーユはオレ以外じゃ満足できねえカラダになってんだからよ♡」

ぴったりとおマンコにくっついていて膝を高速で揺さぶられて、一度落ち着いていた熱がまた簡単にぶりかえす。勃起したクリトリスをずーっと揺さぶられて、いやおうなしに全身の快感が高まっていく♡

「それっ♡やあ♡」

「クリトリスブルブルされてこんな簡単にイキそうになるのに離婚だなんて、できるわけねえだろ。なあ、級長さまよ♡」

絶頂寸前の、限界まで腫れあがったそこをぐに♡とゆっくり膝小僧でぐりぐり♡と押しつぶされる。尿意に似た感覚が限界までせり上がって、ビクビク♡とおマンコが震える。

「やっ♡クリ膝でいじめないでっ♡」

「はは♡やっぱりザコクリじゃねえか♡いいぜイって♡いつもみたいに下品なイキ潮まき散らしながらイケよ♡ミレーユ♡」

ぎゅう♡と乳首をひっぱられると同時に、マン肉にぐに♡と固い膝がめり込む。パチン♡と脳裏で火花が散って、おマンコが簡単に決壊した。

「あ♡あああ♡」

プシュッ♡プシュッ♡と透明な液体がまき散ってエルヴィンの膝を濡らしてい

く。そのまま崩れそうになるカラダを後ろから支えられてふうふうと息を整えていると、おもむろに整った顔が近づいてきた。ぼんやりとしたままエルヴィンの唇を受け入れる。肉厚な舌が縮こまっているそれを引きずり出す。ぴちゃぴちゃといやらしい水音を立てながら表面を擦り合わせられると、ぞくぞくと背中が粟立った。

「なあ、離婚するとかいうなよ、考え直せって」

エルヴィンが切なげに眉を寄せながらわたしの顔を見つめる。まるで本当に好きな女を引き留めているようなその表情に、決意が揺らぎそうになるけれど返事はしなかった。

「そうかよ。まだイキたりねえんだ？」

「エルヴィン、なにいつて……、ちょ、ちょっと！」

エルヴィンが屈んだかと思うと、わたしの膝に手を差し入れて立ち上がる。

お姫様抱っこされたと気づいて、なにをしようとしているのか察してしまう。

「ほーらミレーユちゃん、ベッドいこうな♡」

「ちょ、ちよつとやめて……!」

足をじたばたとさせるが、エルヴィンの体幹はびくともしない。抵抗空しくそのままベッドへと運ばれてしまう。

「ったく、もつと気持ちよくしてやるってのになにが不満なんだよ」

内腿に手をかけられて、思い切り左右に開かれる。愛液とイキ潮が染みついたショーツから、むわつとメスのにおいが立ち上って頬がかあつと熱くなった。

「はっ♡すつげえメスの匂い。もつと触ってほしいんじゃねえの?」

少し意地悪な顔で囁かれて、とぷっ♡と愛液が滴っていく。黙って睨みつけるだけのわたしのショーツに指をひっかけて、ずるりと引き下ろした。

「すっげ、糸引いてる♡」

「くっくっ♡うるさい♡」

恥ずかしすぎて涙目になりながら睨みつければ、ふうとエルヴィンがため息を吐く。

「とんなにマンコトロトロにして別れたいなんて説得力ねえんだよ」

エルヴィンがベッドにうつ伏せにカラダを沈めてから、わたしの腰を引き寄せる。一番大切な場所を無防備にさらす格好に、小さく悲鳴を上げた。

「はっ♡さっきいったのにまだもの欲しそうにプルプル震えてよ♡このデカクリも可愛がられ足りねえだろ？」

「な、なにいつて、やめて、話し合って……」

「こんなぐちよぐちよのマンコで話し合いなんて無理だろ♡」

結婚以来、散々可愛がられたそこに指を差し入れられて、ゆっくりかき混ぜられる。そうすると、エルヴィンの指を覚えているおマンコはヒダヒダを膨ら

ませて媚びるようにきゆう♡とエルヴィンの骨ばった指を締め付け始めた。

「ほら、お前のカラダは話し合いよりセックスがしたいみたいだぞ♡」

「っ、ふざけないで……！ おっ♡おっ♡」

抗議しようとカラダを起き上がらせようとした瞬間に、指の腹がちょうど肉芽の裏の弱い部分を押し上げる♡一気に力が抜けて、ベッドにカラダを預けながら腰をビクビクと跳ねさせてしまう♡

「はは♡威勢がいいのは口だけかよ♡ほんつとスケベなカラダになったよな♡このデカクリなんて結婚したときはつつましくて貞淑だったのにいまこんなにでっかくなって指でつまめちまうもんなあ♡」

エルヴィンは育成された陰核を容赦なく摘まみ、指でちゅこちゅこ♡と抜き始める。その裏側の凹凸を指で優しく叩かれながらそれをされると、意味のある言葉なんて発することができなくなっちゃう♡

「あゑ♡しよれっ♡きもちっ♡やめてえ♡」

「気持ちよくしてやってるんだから気持ちいいの当然だろ♡お前の好きな場所、全部開発してやったのオレなんだからよ♡」

こぶこぶ♡と泉のように湧き出る愛液を指で掬って、裏筋にぬちぬち♡と塗りたいるように擦られる。ザラついた天井を指で押し上げられたら、また簡単に息が上がってきちゃう♡

「ふっ♡いっ♡いっく♡そこばっかかわいがるのやだっ♡いっちやう♡」

思わず正直に根を上げながらいやいやと首を振れば、ますます肉壁を押し上げる指の律動が早くなる。根元から先端までゆっくりクリトリスを抜きあげられれば、また絶頂がそこまでやってきてしまう♡

「ばっ♡だめっ♡クリシコもおマンコいじめるのもだめえっ♡」

「だめじゃねえだろ♡ほらイケよ♡そうすりゃお前がオレの女だって自覚も取

り戻せるだろ♡ほら、イけイけ♡」

至近距離で痙攣おマンコ見つめられていると思うと、絶対にイキたくないの
に♡おマンコに頑張って力を挿入れても、きもちいい場所を指で掠められたら
すぐに力抜けてしまう♡

「やっぱミレーユは根性あるな♡でも残念、オレはお前の弱点知ってるんだぜ
♡」

ドロドロのクリトリスの亀頭を覆い隠すようにエルヴィンの手のひらが覆う。
揃えた指の節々がぴったりと当たる感覚に、まさかと身構えた。

「ほら、これされるとどんなに機嫌わるくつてもすぐイっちゃうもんなあ♡ほ
ら♡クリトリスふきふきしてやるから♡」

「~~~~♡おっ♡おおんっ♡それはんそくっ♡」

まるで窓の拭き掃除をするようにクリトリスを押しつぶしながら容赦なく左

右に手を往復させる。ただでさえイキそうなのに♡クリトリス圧迫されながら指の節にひっかけられながら左右にひねられたらもう我慢できるはずない♡ガクガク♡と全身が震えて、腰が浮き上がる♡カラダが勝手にのけぞってブリッジイキしちゃう♡

「お♡マジで気持ちよくなってきたんだな♡かわいいぜミレーユ♡ほら♡イキ潮まき散らしながらクリ拭きされてイっちゃいな♡」

ゴシゴシ♡ゴシゴシ♡

透명한イキ潮が、クリをお掃除されるリズムでまき散らされる♡もうイキ潮の勢いが止まらないと思った瞬間、ぱっ♡とクリトリスを覆っていたエルヴィンの手のひらが離れていく。

そのままぼってりとした肉土手をぐい♡と開かされて涙目になりながら視線を映せば、熱っぽい瞳でおマンコを見つめているエルヴィンが見えた。

「やっ♡ばかつ♡みないでっ♡痙攣おマンコみちやだめっ♡」

「は？　だめじえねえだろ♡ちやーんと嫁さんがオレの前戯で気持ちよくなってるか確認しねえとな♡」